

阿部静枝歌集『秋草』から『霜の道』へ、その空白

一九四五年敗戦前後の著作と活動の軌跡から見えてきたもの

内野光子 (2012年12月8日 新フェミニズム批評の会)

はじめに

今回は、2006年4月「戦時下の阿部静枝～情報局資料を中心に」と題して報告

1. なぜ阿部静枝なのか：

- ①昭和短歌史上、短歌作品とくに女性歌人として評論に類する著作を大量に残した
- ②戦前は無産女性運動で活躍、戦後は民社党の地方議員としても活躍した
- ③大正末期から「ポトナム」の有力歌人であり、同じ池袋に住む、身近な短歌の師でもあった
- ④敗戦前後を社会的にも歌壇的にも間断なく、精力的に活躍し得たのはなぜなのか
- ⑤それにしても活動、著作の割には短歌史上の評価が高くないのはなぜか

2. これまでの研究状況

- ①『阿部静枝歌集』（短歌研究社文庫）すべての歌集からの抄出作品・著者による解説・年譜
- ②『ポトナム』阿部静枝追悼号（1975年3月）追悼文・年譜・著書解題（内野光子ほか）
- ③主な列伝・評伝ほか：
 - ・吉屋信子『ある女人像』（新潮社 1965年）収録、*「時は償う～原阿佐緒・石原純」は静枝の眼から描かれている部分がある
 - ・樋口美世『女歌人小論』（短歌新聞社 1987年）収録、「女人短歌」初出（地中海）
 - ・荻原欣子『歌人回想録2』（ながらみ書房 2003年）収録、「短歌往来」初出、年譜・50首選（ポトナム）
 - ・中野昭子『ポトナムの歌人』（晃洋書房 2008年）収録、作品鑑賞・歌集案内（ポトナム）
 - ・菅原千代『歌人・阿部静枝とその精神性—短歌作品に見る近代性について』（saga design seeds 2008年）（綱手、青木千代乃）*自立した女性と自由な精神性の表現手段としての自由律短歌に託し、戦後は定型に託して社会詠を確立した
 - ・内野光子「内閣情報局は阿部静枝をどう見ていたか上・下」『ポトナム』2006年1月～2月

④資料探索：（2012年11月現在）

国立国会図書館リサーチ：デジタル資料も含み426件、プランゲ文庫：336件、日本の古本屋76件

3. 本日の配布資料：

- ①阿部静枝短歌作品 1918年～1945年初出掲載誌から抄出 時代別に①～⑥
- ②（未完）阿部静枝著作年表戦前篇（～1945年）
- ③「社会民衆婦人同盟」及び無産政党的歩み(1927～1940) 付 無産女性団体系統図
- ④言論・出版統制の動向と婦人雑誌の推移（1936～1945）
- ⑤報告概要

一 一九二〇年代の軌跡

1. 林うたの時代～歌人としての出発

1899年、宮城県登米郡石森村生まれ、東京女子高等師範学校在学中の尾上柴舟の指導から『水甕』に入会。本名二木静枝に由来するペンネーム「林うた」を称した

作品資料① 1918年12月～1919年8月

素直で感傷的、文学少女的な詠嘆が多い

2. 林うたの時代～石原純との出会い

1920年3月、女高師卒業後、仙台の東華高女に就職、東北帝大教授、アララギの石原純主宰の短歌グループ「玄土」に入会。純と会員の原阿佐緒との恋愛騒動に遭遇

静枝自身は短歌に「開眼」したとする出会い。写実的な明確さが際立ち、家族や女高師内の人間関係から家族、職場、石原純との師弟関係と複雑・重畳的な人間関係を反映する。

*伝記的事項の齟齬：自筆年譜：1923年「四月、退職。上京、阿部温知と同棲、後結婚す」、長男誕生の記載なし。1938年2月夫死去直後に、突如「一子、長男と同居す」

⇒ 樋口：「妊娠し出産した子を産して1922年上京した」

⇒ 荻原：1922年「退職、上京、結婚、長男出生」

作品資料②『玄土』 1920年10月～1921年9月

3. 『秋草』(1926年)の世界

戦時下及び戦後の作風に比して「幻の相聞歌集」としての評価がある

巻頭には、例外的に『玄土』の2作が改作して収録されている。1918年の林うたの時代から1922年10月までの作品がすべて捨てられている。養家に我が子を訪ね、幼子との短い旅を共にし、束の間の母子の交情を描いていると思われる作品、79頁、111頁、119頁などは、知的な若い女性の抒情性に富んだ相聞歌集のもう一つの側面が秘められていたことになる

作品資料③ 『秋草』は、『水甕』『橄欖』『ポトナム』の1922年11月～1926年8月

二 一九三〇年代の軌跡～短歌の変容と無産女性運動への参加

1. 無産女性運動の動向と活動

- ・1924年6月夫、弁護士の阿部温知が革新倶楽部より東京府議会議員に立候補、当選を皮切りに、1929年3月社会民衆党、1936年6月社会大衆党より立候補し、当選。その間、国政選挙にも立つが落選、1937年3月の東京市会議員の落選を最後に、翌年死去
- ・静枝は、夫の政治活動の支援からスタートしているが、1926年社会民衆党結成、翌年11月社会民衆婦人同盟結成後は、役員として積極的にかかわる

2. 「破調」と口語的短歌への傾斜、その背景

プロレタリア短歌とは一線を画した破調、口語的短歌への傾斜 1929年～1930年あたり、自筆年譜で1932年「破調に傾いた」とするより前。プロレタリア短歌運動への心情的な傾斜、自由律・口語短歌運動への共感と同調があったのではないかと。ポトナムから坪野哲久、岡部文夫らがプロレタリア短歌へ脱退している

作品資料④ 『ポトナム』ほか短歌雑誌など 1928年～1935年

3. 定型・文語短歌への復帰、その背景

再び定型・文語に緩やかに戻るのは1937年後半あたり。1937年7月の日中戦争開始から、言論出版統制の強化と戦局の拡大が進むなか、締付けのきびしさが身に迫ってきたのではないかと

作品資料⑤ 『ポトナム』ほか短歌雑誌など 1936年～1939年

三 一九四〇年代～敗戦までの軌跡

1. 「評論家」としての翼賛～夫との死別と執筆メディアの拡大

- ・夫の死後、京橋より信濃町に転居、16歳の長男と静枝の妹との3人暮らしになり、生計は静枝の一人にかかる
- ・執筆のメディアが、従来の女性展望などに加え、婦女新聞、東京日々、読売などの全国紙、婦人公論、婦女界などの婦人雑誌へと一挙に拡大していった
- ・実践的、実用的なテーマが多く、女性歌人、評論家の肩書を自他ともに活用し、効用もあった、単行本出版との相乗効果も大きかった、対談や座談会では、男性の論者と共に、どんなテーマに対してでも、ある程度の知見を持って、明確で、平易に発言できる女性論者として重用された
- ・「内閣情報局は阿部静枝をどう見ていたか上・下」(『ポトナム』2006年1月～2月)から1940年5月～1941年4月の1年間、8大婦人雑誌(婦人公論、婦人朝日、婦女界、新女苑、婦人画報、主婦の友、婦人倶楽部、婦人の友)の記事をジャンル別(小説、評論、随筆、報告、感想、座談、自伝、詩歌)に執筆者別の執筆頻度が記される。静枝は、幅広いテーマで、かつての無産女性運動の実績を踏まえ、女性としての国策推進への実践的な提案や提言を評価している

2. 歌壇の翼賛体制に、短歌作品と散文によって貢献

短歌のほか散文では、結社内外の作品評、歌集評、歌壇時評・展望などが多く、本格的な評論は少ない。常に、女流歌人への厳しい視点と共に地位の向上と称揚／国策を支える短歌の役割、という2点をおさえていた

- ① 「現代女流歌人論」『短歌研究』1935年11月
- ② 「事変は歌壇に短歌に何を与へたか」『短歌研究』1938年5月
- ③ 「女流歌人と歌壇」『日本短歌』1940年8月
- ④ 「新体制に関するアンケート」『日本短歌』1940年12月
- ⑤ 「座談会・歌壇と新体制」『日本短歌』1941年1月
- ⑥ 「現代女流歌人論」(『現代歌人論』昭森社 1942年3月)
- ⑦ 歌壇批評—女流の近詠」(『日本短歌』1944年4月)
- ⑧ 「時評・決戦下の日々」『日本短歌』1945年2月

作品資料⑥ 『ポトナム』ほか短歌雑誌など1940年~1945年

<まとめ>

1. 女流歌人として特異性があった

- ① 戦前は、弁護士として無産運動に参加していた伴侶とともに無産女性運動家、戦後は地方議員としての実績
- ② 戦時下には、夫と死別後、評論家として精力的な執筆や活動をし、大政翼賛に大きく貢献
- ③ 行動力と歌人としての文学的な教養を背景に、明快な社会的な発言は、読者・編集者をひきつけ、国策推進の官僚や軍人たちからも好意的に迎えられていた

2. 歌集出版による過去との決別、清算の意図が顕著だった

- ① 第1歌集『秋草』(1926年)を究極の相聞歌集とし、結婚前の子は夫には理解されながらも、夫への配慮か活動のためか、養家に預け、その存在を明白にしなかった
- ② 第2歌集『霜の道』(1950年)は、フィクション性を強調して、「ひそかに産んだ子を預けて働く母」という設定、雑誌に初出がない短歌を収録(『苦しめど克ちてゆかん』に自作ではない形で発表)した
- ③ 戦時下に雑誌に発表した戦時詠、大政翼賛的な作品はすべて、焼失し、手元がないとして収録しなかった

3. 破調・口語的表現を経た後の短歌作品は、漢語的表現が多く、抒情性、愛唱性にも欠けていた

以上、1. 2. 3の要素が複合的に作用して、短歌史上、評価されなくなったのではないか。一方、文芸史上、文学史上、不都合な作品や発言を隠ぺいすることは、決して少なくないパターンのように思える。とくに、戦時下の作品の隠ぺいや戦争責任回避に腐心することが常套化したり、開き直ったりする例は後を絶たない。これからも戦時下の著作の丹念な検証が必要なのではないか。まだその可能性は十分あると思われる。戦後については別の機会に譲る。